小規模・少人数制症例検討会の提案と運用を通して

○前川聡兵[1)]　土井大介[1)]　稲次正敬[1)]　稲次美樹子[1)]　湊省[1)]　高田信二郎[2)]
１）医療法人　凌雲会　稲次整形外科病院
２）独立行政法人　国立病院機構　徳島病院

【はじめに】
　当院では、入院患者を対象として、P･O･S全セラピストが参加し、症例検討会を行っている。しかし、多人数が参加する症例検討会では発言のしにくさからコミュニケーション量の低下を招いている。それにより、評価・アプローチなどについて具体的な内容の議論が十分行えておらず、症例検討会の内容がリハビリに反映されていないのでは？などの問題点が考えられた。そこで、小規模・少人数制症例検討会を新たな取り組みとして提案・運用し、その結果と変容について以下に報告する。
【目的】
①小規模・少人数制にして発言・質問しやすい環境に設定することで、コミュニケーションの活性化を図る。②P･O･S個別とし、より専門的な議論を行うことで、様々な視点・考え方での評価・アプローチを提案・アドバイスが可能となり、リハビリの変容を図る。
【方法】
１チームを５～６名の少人数制とする。各チームに１人リーダーを選出し、議論を進める。より専門性の高い内容とするため、P･O･S個別のチーム編成とする。
【結果】
アンケートに回答した１４名の職員のうち､全ての職員が意見･発言がしやすくなったと回答。８５％の職員が専門性の高いコミュニケーションができたと回答。９２％の職員がリハビリ時の視点・考え方・アプローチに変化につながったと回答。
【考察】
今回、小人数制症例検討会を行うことで、コミュニケーション量の増加を図ることができた。また、具体的な評価・アプローチ方法などについて検討を行うことで各セラピストの視点・アプローチに変化をもたらす結果となった。